

神奈川支部情報

第27号

発行日 2013年7月19日

＜発行者＞撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

ホームページ: <http://kanagawa.uketugu.org/>

＜連絡先＞松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

3月16日に絵鳩毅さんはお元気に100才を迎えられました。神奈川支部では、7月13日に絵鳩毅さんの100才を迎えられた記念講演をしていただき、ささやかなお祝いの会を行いました。絵鳩さんご本人は視覚や聴覚の衰えを仰っていましたが、張りのある声は聞いている私たちにはまったくそれを感じさせられませんでした。今回も、何カ月も前からパソコンに向かって話される内容をコツコツと原稿に書いて、そのすべてマスターしてお話ししてくださいました。奥様もたいへんお元気で、奥様とご一緒に生活されている老人施設の看護師さんたちも講演会に参加してくれました。第1部が始まる時間には50名の参加者で会場いっぱいとなりました。絵鳩さんが出征前につとめていた長野県上田高等女学校の教え子さんも見えられました。

お話しの最後部分では、100年の思いがこみ上げてこられたのでしょうか、感きわまって絞るような声で話されました。聞いている私たちも緊張と感動で息も止まるようでした。貴重なお話を聞かせていただき、たいせつな時間をともにした参加者の感動はいつまでも胸に刻まれることでしょう。以下、本号では講演部分のみ編集しました。質問に応じてお話されたことも、大切なことばかりでした。また支部情報でお知らせしたいと考えています。

第2部は、場所を変えて会館のレストランで食事を囲んで和やかなお祝いの会を催しました。これからもまだまだお元気で、もっともっとお話しを聞かせてください、と皆んなでお願いしました。

100才のお祝い会の提案に絵鳩さんもたいへん喜ばれて、絵鳩さんをお願いするお話しを表題について「100才を迎えた絵鳩毅さん、大いに語る！」とお願いしました。ですが、絵鳩さんが遠慮されて表記の表題を示されたのでした。

以下、本文は絵鳩さんが準備された原稿に、お話のなかでつけ加えられた部分も含めて編集したものです。

百寿の人生放談

～百寿の秘密を探る～

絵鳩 毅

はじめに

ただ今紹介をいただきました絵鳩毅です。年をとりまして、目も耳も不自由になりました。そのために、いま話している声がどの程度皆さまに伝わっているかよくわかりませんが、これから話しをさせていただきます。よろしくお願いします。

私は今年の3月16日に、百才の誕生日を迎えました。その当日、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」神奈川支部の皆さまから、お祝いとしてすばらしい生花をいただきました。その上、本日はまたこのようなお祝いの催しまで設けていただきました。まことに恐縮しています。心から深くお礼を申し上げます。

本日は、支部長の松山さんから「百才を迎えての感想などを、自由にお話してください」とのことですので、しばらく時間をお借りして「百寿の人生放談」、とくに「百寿の秘密を探る」とでも題して、「私が百才まで生きた秘密はなにか」について思いつくままのべてみたいと思います。

私は10年ほど前から、よく「長生きの秘訣はなんですか」と聞かれましたが返答に困りました。私は、青年時代には世間で言う「人生わずか50年」を信じていましたし、撫順戦犯管理所を釈放されて帰国した当初は「戦争で人一倍苦勞したから、長生きはできないぞ」と覚悟していました。それが、はからずもなんと百才までも生きのびました。「なぜだろうか」と、近ごろあらためて思うのです。そのことについて、最近思ったことを、自問自答の形でのべさせていただきます。



(1) 私の家は長寿の家系か？

私は第1次世界大戦の1年前、すなわち大正2年の3月16日に、石渡省吾・美津の次男として鳥取市で誕生しました。父は師範学校の教師でしたが、私の3才のころから父の郷里である南房総の寒村に帰り、高等小学校を卒業した農村青年に2年間の補習教育を行う「私塾」を開いていました。

いまもときどき、「あなたの家は**長寿の家系**ですか」聞かれることがありますがどうでしょうか？祖父は84才、祖母は63才、父は65才、母は71才で亡くなり、私をのぞく5人兄弟のうち4人は78才以前に他界し、ひとり末の妹だけが88才まで生きのびたにすぎません。つまり、私の知る肉親9人のうちわずか2名だけが、日本人の平均寿命である83才を超えたにすぎません。したがって、私の家は「長寿の家系」とは言えないでしょう。

だが、ちなみにある調査によると超高齢者に最も多い血液型は「**B型**」だそうです。私はたまたまそのB型であります。

(2) 私の長寿は「神の恵み」か？

ここで思うことは、俗に言う「運・不運は天にあり」です。つまり、私の長寿の幸運は「天」(すなわち、神・大自然の摂理)によって授かった「恵み」とでも言うべきでしょうか？恐らくこれがもっとも妥当な「究極的な回答」かも知れません。

たしかに私の人生をふり返るとき、私の今日あるのは、「天の恵みを受けた運のよい人間だったからだ」と実感せずにはおられません。

2, 3の例をあげてみます。たとえば、小学校5年生のときでした。私の登った柿の木の枝が折れて約3メートルの高さから落下してしまいました。ふと気づくと、腹のすぐ横に長さ10センチほどの竹の切り株がヤリのように突っ立っていました。その上にでも落ちていたら、いまの私はなかったかも知れません。

またそのころのこと、村の神社の浅い池でひとりで水遊びをしていたときいきなり深みに落ちこんでしまいました。まだ泳ぎを知らなかった私はおぼれ死にするところでした。たまたま運よく岩角に脚がかかり、けりあげると体が浮いたので、目の前の雑草をつかんで這いあがって命びろいしました。

さらに決定的な一件があります。それは軍隊当時のことです。敗戦の年の3月、大隊本部の隣の県で蒙陰というところがありますが、そのわが警備隊が3千名ほどの八路軍の襲撃を受けて全滅する、ということがありました。

そのとき、わが部隊の主力は別のところで作戦中でしたので、大隊本部の所在地・新泰には、教育中の初年兵をふくむわずかに百数十名ほどの兵力しか残っていませんでした。だが、留守部隊長をあずかっていた機関銃中隊長・村社中尉（私の初年兵教育の教官）は、救援隊の派遣を決心しました。当時私は陸軍伍長で、機関銃中隊の初年兵の教育係助教をしていました。命令受領に行きますと、隊長は「機関銃中隊は1ケ小隊（1ケ分隊欠）を出しなさい」と言うので、専任伍長である私が当然行くべきであると考え、「私が分隊長で参ります」と申し出ました。だが、隊長は「いや、君は残って初年兵教育を続けなさい。私は小隊長に東少尉、分隊長には張山兵長を連れて行く」と言い、自らわずか5, 60名の部隊長として出発しました。だが、途中敦台の丘でまた八路軍の大部隊に包囲されてまたしても全滅させられてしまいました。そのときの隊長の遺体には数十発の弾痕が残っていました。この私をかばってくれた村社隊長のひと言が私の命を救ってくれたのでした。

（３）長寿は医学の進歩の賜物か？

私の若いころ、多くの日本人は「人生わずか50年」を口にしていましたが、いまでは日本人の平均寿命は83才で世界第一位を占めております。このおどろくべき飛躍はなにがもたらしたのでしょうか？

まず一般論として言えることは、20世紀における医学の飛躍的進歩でありましょう。とくに、生まれた子供のかなりの者が、成人になるまでに死を免れなかった時代〔註〕に「抗生物質」の劇的な登場によって、人類の平均寿命を大幅に延長しました。現に、20世紀のはじめには15億人に過ぎなかった世界の人口も、いまやそのおかげで60億人を越えるにいたりました。

晩年になって私も得体の知れない高熱で3回ほど入院しましたが、この投薬により救われました。抗生物質の登場は、たしかに私の長寿にも一役買っておりましたが、それだけではまだ私個人の長寿を解き明かすには、不十分でありましょう。

〔註～乳児の死亡率は、中央アフリは10人に1人、ロシアは100人に1人日本は1,000人に1人（WHO2012年調査による）〕

（４）良い自然環境は長寿の温床か？

①温暖な地帯にあること

「日陰の花は育たない」ように人間の成長、ひいては長寿にも豊かな太陽

光線に恵まれた自然環境（温暖な地帯）が必要でありましょう。

私は、幼少年時代を南房総の寒村で過ごしましたが、ここは気候温暖な日本の中でももっとも良い自然環境に恵まれていました。真夏日にはよく夕立があつて涼しく、真冬でも菜の花盛りでした。ここで私たちは花を摘み、虫を追い、木の実を採り、小鮎を釣るなどして日々を楽しく遊びたわむれていました。そこは、私たちにとってまさに「地上の樂園」で、ここでの日々の遊樂は子どもたちを健全に成長させて、やがて長寿への温床となったのではないのでしょうか？

「世界保健機構」（WHO）の今年の各国の平均寿命調査は、このことを裏書きしております。

温暖地帯に属する日本が1位で平均寿命は83才、つづいてフランスとイタリアがともに4位で82才、寒冷地帯のロシア共和国は178位で69才、熱帯地方の中央アフリカ共和国は193位でわずか48才です。

これによっても、人間に長寿をもたらす自然環境は、気候が温暖な地帯に限ると言えるでしょう。

②新鮮な食料が豊富なこと

また、人間の成長、とくに幼少年の成長に大切なことは新鮮な食料が豊富であることではないのでしょうか？ 当時わが家では父が仕事の余暇に野菜を栽培していたので、新鮮な野菜にこと欠くことはありませんでした。また、館山湾で獲れた新鮮な魚類は、その日のうちに日々行商人が持ちこんできてくれましたので、とくに鰯、鯖、鰯などの青物の魚は毎日、三度三度いやというほど食べさせられました。肉類は年にわずか数回ほどでした。新鮮な野菜と魚類のこの「粗食」こそが子どもたちを健全に成長させて、これもやがて長寿を生む「温床」となったのではないのでしょうか？

ちなみに、ある調査では「長寿者には、食べ物に好き嫌いのない人が多い」といいますが、私もまたその一人でした。

（５）青少年時代のスポーツは長寿への基礎作りか？

幼少年時代の私は、日々友だちと南房総の松林や野原を駆けまわって飽きることのない健康児でした。小学生時代の6年間は1日も欠席しませんでした。とくに、小学校の5年生のころからは**スポーツに熱中**しました。その引き金となったのは、わが豊房村の青年団が（中学生の兄も参加した）安房郡下の競技大会で大活躍をしたのに刺激されてのことでした。

当時部落の上級生たちは日曜ごとに集まって神社の庭の清掃をする習慣がありました。その後皆んなで50㍍競争、走幅跳び、走高飛びをしてたがいに成績を競いあいました。そして私は、6年生の運動会に初めてとり入れられた走幅跳で1位、走高飛で2位の成績をおさめました。

さらに、高校受験の浪人時代には日々12時間もの勉強を計画していましたので、体力を維持するために意識的に運動を試みました。家の裏の畑に砂場をつくり、ここで毎日必ず1時間、走幅跳・走高飛・三段跳・棒高跳を行い、その結果を日々記録しました。

そのおかげか、高校3年間では発熱による欠席は1日のだけでした。

大学時代は文学部の各科対抗野球試合に出た程度でしたが、山梨の中等学校の教師になると競技部長となり、東山梨郡下の教員競技会に出て三段跳びで12㍍24、走高跳びで1㍍60の成績で、ともに2位となりました。また、軍隊の初年兵時代、中隊の短剣術の試合では3年兵を破って優勝し、連隊の全初年兵の対抗試合では準優勝となりました。さらには、終戦直後の32才のときは北朝鮮で行われたたれた大隊の運動会の走幅跳では、5㍍98で優勝となり、さらに「撫順戦犯管理所」での最後の運動会」には、43才で走幅跳に出ましたが、5㍍48で準優勝となることができました。青少年時代のスポーツは、たしかに身体だけでなく、精神力をも鍛えて長寿への基礎作りとなるのではないのでしょうか？

（6）よい「人間環境」は長寿への飛躍台か？

関東大震災の2年後、大正14年4月に私は千葉県立安房中学校に入学しました。この学校には残念ながら、校規の粛正をタテにした「お説法」という習慣がありました。それは最上級生が下級生を学年ごとに集めて、そのなかの気に入らぬ生徒を殴る蹴るという悪習でした。だが、このような悪い人間環境のなかでも、私は幸い終世の親友・梅本克己を得ることができました。

私と彼は中学、高校、大学、文部省のコースを同じゅうし、とくに私の青春時代のよきパートナーと言いますか、マラソンの細綱をもって一緒に走る「伴走者」であったと思います。

私が軍隊にあったとき、彼は水戸高等学校の教授になりましたが、敗戦後は日本共産党員となり、戦後日本における労働運動の理論的指導者として活躍しました。残念ながら65才で他界してしまいました。

そして梅本とともに1年間浪人して、旧姓水戸高等学校文科に入学して3年間寮生活を送りましたが、この寮生活のなかで私たちは初めて人間は「互いが対等であり、互いの人格を尊重し合う」という、人間関係のあるべき姿を体得しました。

私は梅本とともに毎晩のように、よき先輩である哲学学徒の部屋などで行われるコンパを訪ねては、「人間はいかにあるべきか！」などなどの人生問題をまじめに討議しあいました。この会合を通じて、私たちは、自らの精神力を鍛錬しあい、互いに終生の目的をもつ人間に成長することができました。

さらに昭和9年4月には、また梅本克己とともに東京帝国大学文学部倫理学科に入学しましたが、ここでともに和辻哲郎主任教授に師事しましたが、私はとくにカント倫理学を学び、その「**人間尊厳の思想**」は私の「生涯の行動指針」となりました。

ちなみにある調査によれば、超高齢者には「頑固な人」が多いと言いますが、それは言いかえると「信念のある人」のことでありましょう。すなわち、生涯を通じての目標をもち、それを追い求める人間になってはじめて、人間は長寿への飛躍台に立つことができるのではないのでしょうか？

(7) 15年戦争の逆境は長寿のための煉獄か？

私は昭和17年6月、長野県で中等学校の教師をしていたとき28歳で軍隊に補充兵として臨時召集されました。佐倉の連隊できびしい軍事教練を受けて中国山東省に送られました。そこで中国への侵略戦争に参加しました。そして敗戦の年の6月のことでした。大隊長の命令にしたがって、教育中の中隊30名に中国人捕虜を交互に刺突させるという戦争犯罪を犯してしまいました。

敗戦後はシベリアに送られて抑留5年間、さらに撫順戦犯管理所で6年間の拘禁生活を送りました。

昭和31年9月に帰国した当時、私は「戦争でひと倍苦労したから長生きできないぞ」と思っていたのですが、100才の今日まで生きのびてしまいました。そこで最近あらためて思うのです。否定的に考えていた15年間の逆境こそが身体だけでなく強い精神力も鍛えてくれたのではないかと。

とくに撫順戦犯管理所での6年間は、最後に日本軍隊と自分自身が犯した戦争犯罪を暴露するという死にものぐるいのたたかいでありましたが、その

なかで大きな精神的な飛躍を遂げることができました。そのことがかえって私の長寿のための良い煉獄（叩き台+）ではなかったか、ということです。

佐倉の連隊では日々の激しい軍事教練や諸勤務で追いまくられて、自由時間などまったくなかったばかりか、古年次兵に日夜叩かれました。とくにシベリアでは、粗悪な食事でと極寒のもとでも強制労働に駆りだされました。

これらはいずれも、まさに生き地獄の体験でありました。つまり、ここにあったものは日々の強制的な肉体労働のみでありましたが、これは間ちがいなく私たちの身体を鍛えたあげ、また苦難に対処する精神力をも強化することにつながったのです。

とくに、「撫順戦犯管理所」での6年間は日本軍隊と自己の犯した戦争犯罪を告白する、まさに「死の闘争」でありましたが、私たちはこれを通じて精神的な飛躍を遂げ、「侵略戦争の尖兵」から「平和を守る人間」へと転変することができました。

つまり、**新たな人生への目的（侵略戦争に反対し、反戦平和、日中友好の活動）を持つ人間として再出発することができました。**

私が体験した15年間の戦争体験の逆境は、はからずも「長寿のための煉獄（鍛錬場）」となった、といま私は思います。現にわれわれの仲間は、一般人より高齢者が多く、わが「中帰連」は平均年齢80才を越えるまで組織活動が続けることができました。

（8）私は逆境から得た楽天主義者である

ある調査によると超高齢者にもっとも多いタイプはクヨクヨしない人、すなわち「楽天主義者」だと言います。私もその「楽天主義者」の一人です。私の場合はとくに過去の逆境から会得したものであり、積極的な楽天主義者であります。

ここで一方の「消極的楽観主義」についてもふれておきます。日本軍隊の初年兵教育は、日夜の鉄拳制裁で人間がもつ尊い感情や理性をたたきつぶして空白所状態にし、ただ上官の命令一下反射的に反応する人間・「奴隸」の養成であり、戦場では上官の命令一下反射的に罪のない他国人を平気で殺害する「殺人鬼」の養成でした。

したがって、ここでは人間の自由意志は完全に奪われていたので、私たちはただその日その日をなり行きに任せるという生き方、すなわち消極的な楽観主義者とならざるを得ませんでした。

つぎに私が会得した積極的楽観主義についてです。これは、シベリアでの5年間の捕虜生活のなかから、意識的に把握した人生観です。いまもってそうです。

日々の苦しい強制労働のなかで、捕虜のだれもが望んだのは「1日も早い帰国」でした。1年経っても2年経っても希望がかなえられなくなってくると、**捕虜に様々な現象**が起きました。

ある者は前途を悲観して自殺をはかり、ある者は脱走をはかったが、捕えられた上銃殺されました。多くの捕虜は早い帰国を夢見て民主運動に走りましたが、なかには帰国を急ぐあまり友人をも売る「密告者」となる者もいました。

私は、ソ連の政治部員に要求された親友の密告を拒否したことで、600人収容の所内でただ一人「反動分子」の烙印を押されて、「反動ラーゲル」に追放されてしまいました。私自身も望む帰国は年々裏切られ、また年ごとに衰えてゆく体力の情勢のもとでこう悟りました。日々帰国を思い悩むことは、「百害あって一利なし」と。そこで、苦境をのり越える自己の思想として、諺に言う「明日は明日の風が吹く」、「待てば海路の日和あり」を選びました。これは、私がシベリアの苦境のなかから自らの思考により獲得した「積極的な楽観主義」であり、現在も変わりありません。

(9) 第2の人生を大切にしよう！

～ここに長寿への鍵がある～

人間はだれでも長寿を望みます。その長寿も心身ともに健やかで、楽しい余生でなければなりません。そのためには、第2の人生への出発点が大切です。

人間は、生涯をかけた職場を去ったとき、だれもが一時精神的虚脱状態になります。これを放置すると老化は急速に進行します。私たちは職場を去る以前から、第2の人生での目標を決めておくべきではないでしょうか？

それは趣味であれ創作活動であれ、まず知的活動であることが有効でしょう。人間の精神と身体とは相関関係であり、精神の活性化は身体の老化を阻む歯止めともなります。

私は昭和56年6月、私は20年間勤めた藤沢東海岸郵便局長を68才で定年退職しました。当初は社会から「無用物」として追放されたようなくやしきや悲しさにかこわれました。その上、藤沢部会がしてくれた送別会は去

ってゆく者への愛情もない冷たいものでしたので、まったくやしくて、悲しくて、片瀬海岸の浜砂に横たわり、男泣きに泣きました。

だが、幸い私には以前から退職後の目標がありました。帰国して「上田染谷丘高校」の教師に復帰してつとめていたころ、小説「安曇野」の作家・臼井吉見氏に講演を依頼した際に、私の戦争体験を語ったら彼は即座に「それは貴重な体験ですから、ぜひ書き残しなさい」と言ってくれました。私もその場でこれを第2の人生での第1の目標と決めました。

① 執筆活動

「わが生涯の回想録」について。私は退職後、約1ヶ月を、残務整理や新局長への申し送りに費やした後、昭和56年8月からかねて計画していた「わが生涯の回想録」の執筆に当たりました。日々、明けても暮れても机に向かって執筆を続けましたが、それはじつに楽しく、充実した生活でした。1年1ヶ月で幼少から帰国までの前半生を書き上げました。これは後に「大正から昭和へ」の4巻として自費出版しました。

俳句と短歌への挑戦について。次に私が選んだのは、俳句でした。数種の俳句雑誌への投稿を9年間続けました。その後でに入選句650句を選び、句集「望郷」なる自製本を作りました。

そのつぎに私は、79才から6年間、短歌に挑戦しましたが、最後は近藤芳美が主宰する「未来」の会員となりました。全期間の入選歌500首を選び、歌集「晩鐘」なる自製本を作りました。

以上の俳句と短歌への挑戦期間は、私が「中帰連」へ復帰しての15年間の活動時期でもありました。

② ハイキングと旅行

また、私はまた郵便局長時代から「中帰連」復帰時代にかけて毎月2, 3回、妻とハイキングを楽しんできました。近くは江ノ島・鎌倉からはじめて、箱根・熱海・湯河原・丹沢・三浦半島からさらには横浜・東京・房総地方まで歩きまわりました。箱根や丹沢の山々にも登りました。

また、宿泊や日帰りの旅行も楽しみましたがそれは北海道から山陽地方までの各地に及びました。いずれのハイクでも、旅行でも私は大自然の中で生きる喜びを満喫しましたが、それらは老齢期の健康増進に役立ったばかりか、精神をも活性化して、生活を豊かにしてくれました。

(10)「中帰連（正統）会員としての活動

第2の人生における精神の活性化の妙薬は趣味であれ、創作活動であれ、つねに頭脳を使う知的活動をすることでありましょうが、なかでも多くの人間と接触を持つ「社会活動」が最良であります。なぜなら、人間はアリストテレスが言うように本来「社会的動物」でありますから、多くの他人との接触活動のなかでこそ、最もよく頭脳の活性化が行われ、また身体の高齢も防げると思います。このことは、私の第2の人生での「中帰連」の活動が教えてくれました。

中帰連の統一への活動について。私は第2の人生の1年余り「自叙伝」の執筆に没頭していましたが、翌昭和57年「新編三光」の出版記念式典で、再会した友人たちの刺激を受けて、昭和58年4月、「中帰連」（正統）の会員となりました。年齢はすでに70才でした。

翌年10月、両組織の合意によりご招待した「撫順・太原戦犯管理所元職員代表訪日団」を機に統一の機運が高まり、両組織からから5名ずつの代表（私も正統の1員）を選んで「統一準備委員会」を作りましたが、1年有半にわたる討論を重ねた結果、ようやく「認罪」の原点に立ち返って合意し、昭和61年11月に統一を果たしました。

<休憩>

（11）統一中帰連会員としての15年間の活動

私は「統一第1回大会」で常任委員に、さらに次の第2回大会では常任委員長に推せんされました。そこでその後は会の運営、おもに月1回の常任委員会、1年おきの全国大会と全国運営委員会、これに力を注ぎました。

この「統一中帰連」での諸活動は、私の頭脳を活性化したのみならず、会員との共同活動や証言活動での大衆との接触により生きる喜びを、さらには私の第2の人生における充実感を与えてくれました。

第1節 統一直後の三大事業

中帰連統一後に3つの大きな事業を行いました。その第1は中帰連の活動資料の贈呈について

昭和62年4月、会は撫順戦犯管理所からの要請により会の活動資料を収集し、450点（22梱包）を東京で贈呈式をもって管理所に贈呈しました。私はその主なる実務を担当しました。

次は撫順の「桜花飯店」への寄贈について

昭和63年4月、会は会員のカンパによる1千万円相当の炊飯機器や什器などを、撫順市が経営する「桜花飯店」に寄贈し、その開店式典には22名の代表団を送りました。

3つ目は「謝罪碑」の建立について

昭和63年12月、会は中国政府の許可を得て管理所の前庭に高さ6メートル余の大理石の、「向抗日殉難烈士謝罪碑」を建立して、過去を謝罪し再び侵略戦争を許さぬ平和と日中友好の誓いを刻みました。この開幕式典に会は19名の代表団を送りました。

第2節 侵略戦争に反対し、平和を護る活動

次は常任委員長としてのおもな活動についてのべます。

会が統一をはたすと、全国各支部の戦争証言活動が一段と活発化し、その回数は数えきれませんので省略し、ここでは会の本部が中心となって活動したおもなるものについて、年代順にのべます。

① 昭和天皇の戦争責任を問う活動

昭和天皇の病状が悪化するにつれ、マスコミは天皇を美化する風潮かもしだしたので、会は昭和64年「昭和天皇の戦争責任を問う決議文」を会の声明として公表し、また図書「天皇の軍隊」と「侵略」とを出版しました。そしてさらに、「天皇の国葬を許さない2・23集会」にも参加しました。

② 自衛隊の海外派兵に反対する活動

会は平成2年に「PKO法案の撤回を要求する声明」を発表し、翌平成3年には「湾岸戦争への自衛隊派兵に反対する声明文」を、首相、各政党、マスコミ、友好団体等に郵送し、また友好諸団体と数回にわたり反対集会も開催したりしました。

③ 従軍慰安婦問題についての証言活動

会は平成4年、西野留美子氏同席のもと、「従軍慰安婦問題についての証言・学習集会」を開催しました。ここで会員が証言し



た全内容は、同氏の著書「15 年戦争と従軍慰安婦」のなかに収録されました。

④「731 部隊展示会」への積極的参加

この展示会は平成 5 年から 2 年間、61 の都市で開催され 23 万人の入場者を数えましたが、そのほとんどの会場で、わが会員がその運営と証言活動とに積極的に参加しました。

⑤その他の活動

会はまた、平成元年以降「不戦兵士の会」など友好 4 団体と協同して毎年「7・7 記念集会」、「8・15 記念集会」、「12・8 記念集会」を開催したほか、「戦後 50 年記念集会」、「真珠湾攻撃 50 周年記念集会」、などにも参加しました。

第 3 節 日中友好交流活動

①中国での図書出版への協力

平成 2 年、会は管理所の依頼を受けて「中帰連 30 年の歩み」を富永、絵鳩、三尾の 3 名で共同執筆して郵送しましたが、これはやがて北京で出版された図書「世界を震撼させた奇蹟」の付録として収録されました。

翌平成 3 年には、撫順市政教文史委員会の依頼により私は「中帰連訪中団の記録」をすべて収録して郵送しましたが、後これにより、「難忘的中国」なる図書が出版され、その贈呈式が東京で挙行されました。

またこの年、北京で出版予定の写真帖「覚醒～日本戦犯の教育と改造の記録」について、私と山中常任委員とで新しい資料を提供し、また一部校正もしました。さらに会としてこの出版への資金援助もしました。

④ 会が組織した訪中団

会の創立以降 30 年間に、会が組織した訪中団はわずか 8 回で、参加人員も 75 名に過ぎませんでした。統一後の 10 年間に派遣した訪中団は、21 の団で、参加人員は 300 名に達しました。

私個人としては統一以後 3 回、会の訪中団に参加しました。

「中帰連統一代表訪中団」について

統一第 1 回大会で、富永団長以下私を含む 8 名の訪中団が編成され、「中国国際友誼促進会」と「撫順戦犯管理所」との間で今後の友好交流について協議しました。

2 回目は、平成 5 年に編成された「93 中帰連友好訪中団」（団長富永、副

団長私絵鳩以下 50 名) の最大規模の訪中団でした。この団は 10 日間にわたり、北京・瀋陽・撫順・西安・上海・杭州などを歴訪しましたが、とくに意義深かったのは、撫順で管理所で、団長とともに「謝罪碑」に献花した後、お世話になった先生方 45 名をご招待し 37 年ぶりの再会を果し、心からの感謝の誠を尽くすことができたことでした。帰国後、私は団員の感想文を集め 1 冊の「記念文集」を出版しましたし。

3 回目は平成 9 年、私と高橋哲郎君の両夫妻 4 名が「中国国際友誼促進会」より招待を受けた訪中団でした。私たちは 5 日間、故宮、景山公園、頤和園などの観光のほか、「中国人民抗日戦争記念館」や「南京虐殺 60 周年記念展示会」などの参観も許されましたが、とくに後者(南京)の会場では、中国中央テレビ局の取材を受けました。その場で南京事件での被害者と対面しましたので、私は日本国民を代表して深く謝罪いたしました。このときの映像は、即刻全中国に向け放映されたと聞きます。

⑤ 会が招待した中国の訪日団

会は発足以来の 30 年間に、中国各界からの訪日団に対して 13 回にわたりその歓迎行事に参加してきましたが、自主的に招待したのは、統一直前の「撫順・太原戦犯管理所元職員代表訪日団」だけでした。

だが、統一すると会は自主的に中国からの訪日団をご招待するようになり、撫順戦犯管理所、中国国際友誼促進会など 4 団体の代表団を 20 回ご招待し、その人員は 59 名でした。そしてこの各団は、いずれもわが会の全国大会などの行事への参加、各地の観光だけではなく、日本の各種民主団体との交流を深められました。

第 4 節 広報・出版活動について

(1) テレビ放送

① NHK スペシャル

「戦犯たちの告白～撫順戦犯管理所 1062 人の告白～」

平成元年 8 月 15 日、NHK は上記の番組(わが会が全面協力して完成した番組)を 1 時間 50 分にわたり全国放送し、120 万人の日本国民に衝撃的な印象を与えました。この番組には 10 名の会員が管理所で書いた犯罪手記と今の心境とが放映されただけでなく、わが会員 3 名が、中国の現地を訪れ、被害者たちに対面して謝罪する映像も組みこまれました。

視聴者から寄せられた数多くの感動的な感想文の 1 例を紹介します。「昨

晩はNHKスペシャル「戦犯たちの告白」ありがとうございました。・・NHKとは思えないシッカリした主張があり、感動しました。1062 編の手記の出版を祈らずにはられません。このまま終えるのはもったいないと思います。とにかく私が人生で出会ったNHK番組の中でNo.1でした！」と。

② 日本テレビ放送

「ある戦犯の謝罪～土屋元憲兵少尉と中国～」

会がその取材に全面的に協力したこの放送は、平成2年8月18日に40分間深夜放送にもかかわらず、大きな反響を呼び、その後この制作を担当した山形放送により再放送されました。このなかで会員土屋芳雄は、過去自らの手で殺害した張永興烈士の4女である張秋月夫妻と対会し、その前に身を投げ出して謝罪しました

(2) 出版活動

出版活動はまた、会発足以来の重点活動目標でありましたので、統一前でもすでに「三光」(5万部)、新編三光」(25万部)などの出版をして、大きな反響を呼びましたが、統一後にも先にのべたように「天皇の軍隊」と「侵略」の他に以下の出版がありました。

「私たちは中国でなにをしたか」～この図書は昭和62年、「三一書房」より6,000部出版しましたが、私も編集委員の一人でした。

平成元年には、日本社会主義センターの依頼を受けて、機関誌「進歩と改革」に、「侵略～体験と反省」と題して私を含む会員13名が新たに執筆した戦争証言を連載しました。その後、私はそれを1冊の本に収録して、全会員に無償所配布しました。

平成7年に中帰連訳編「覚醒～撫順戦犯管理所の6年」発刊～これは、撫順市政教文史委員会が管理所元職員の手記や口述を収録した「世界を震撼させた奇蹟」を、会が翻訳し、編集して平成7年に上記の表題で、大阪の「新風書房」より出版しました。私も3名の編集出版委員となり、まず1冊のワープロ本を作成して中国に送りその事前承諾を受けました。

中帰連編「帰ってきた戦犯たちの後半生～中国帰還者連絡会の40年」発刊～平成5年「中帰連40年史編集委員会」の誕生により企画されましたが、最終的には私を長とする沢田二郎、高橋哲郎の3名で作る「編集出版委員会」に任されました。

検討の結果、構成を前史、分裂までを第1章、分裂後の正統の活動を第2章、分裂後の中連の活動を第3章、統一後の活動を第4章とし、前史を沢田

二郎、各章は、それぞれの責任者である国友俊太郎、富永正三、絵鳩毅が執筆しました。

私はその全原稿のすべてを2年がかりでワープロ印字して出版社に渡し、平成9年4月の「中帰連帰国40周年記念式典」に「新風書房」から発行されました。これは約900ページほどの大冊となり、発売価格も5千円となりました。

季刊誌「中帰連」の発行～平成9年6月、わが会を名指しで非難する反動学者たちに対抗するため、年4回発行の季刊誌「中帰連」の発行に踏み切りました。編集委員長に推薦された私は、創刊号は「日本は中国で何をしたか」として会員の手記を収録して侵略戦争の実態を暴露しました。これも大きな反響を呼ぶことができました。「朝日新聞」をはじめ地方の新聞紙上にもとり上げられ、事務所の電話は問い合わせのために当分鳴り放しだったと言う。

以後、私は各号のテーマとその掲載内容を2ヶ月前の常任委員会に発表して了解を得た後、更に編集委員会で検討した上決定してきました。だが、その第7号の編集委員会の席上で、私を憤激させる一件があり、私は編集長も会の常任委員長も、辞任することを決意しました。だが、辞表提出後から会が解散するまでの4年間、私は会員としての活動は放棄しませんでした。

（12）「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の特別会員として ～89歳以降現在まで～

平成14年4月、会が高齢のため解散するや、会の精神と活動を受け継ぐ会＝「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」が誕生しましたので私もその特別会員となり、ひき続き活動させていただいております。

①この間の執筆活動について

この時期は、以前に比べて自由時間が多く持てるようになったので、日々の生活はパソコンによる執筆活動となりました。この期間に作成した未発表の自製本は日記、雑記帖、句集、歌集などの10数冊でした。

とくに最近では「撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部」のご援助により、「撫順戦犯管理所の6年」、「シベリア抑留の5年」、「皇軍兵士の4年」の3小冊子を発行させて頂きました。

また、雑誌「中帰連」や同人誌「白壁」を始め諸雑誌に求められて、投稿した戦争体験記などは、17編でした。

②マスコミ等の取材に応える

また私は、NHK、BBC 放送局、北京中央放送局、TBS 放送局、ポーランド中央ラジオ局、フランス中央ラジオ局、朝日新聞社等々のスコミや各民主団体・また個人からの取材を受けましたので、侵略戦争の実態、自己の犯した戦争犯罪、中国で受けた人道的待遇等々を語りましたが、その回数は、合計 26 回となりました。

③ 戦争証言活動

この間にもっとも力を入れたのは戦争証言活動でした。

この期間での活動の中心は、戦争証言活動でした。この間私は、東京大学、早稲田大学を初め 10 の大学、高校 2 校、中学校 1 校に対して合計 23 回ほど実施しました。また民主団体では、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部」、「神奈川歴史教育を考える会」をはじめ、通算 25 団体で実施し、前者と合わせると 48 回になりました。

これらのなかで、最も参加者の多い会場では 600 名、最も少ない会場では 10 名程でありましたが、いずれの会場でも、皆さん真剣に耳を傾けていただき、私に大きな感動とさらなる勇気を与えてくださいました。

また、これを機に多くの反戦平和、日中友好の活動家を友人にもつこともできました。誠に感謝に堪えません。この証言活動こそが、私の後半生に与えられた戦争責任であると共に、また私の後半生を充実させ、生きる喜びを与えてくれました。

おわりに

私は、たしかに天・すなわち大自然の摂理によって、人一倍丈夫な身体を与えられた好運児でありました。小学校から高校卒業までの 14 年間のうち 12 年間は 1 日の欠席もありませんでした。

さらに、自然環境にもまた人間環境にも恵まれて身体的にも、また精神的にも、健全な成長を遂げることができて、「終生の哲学徒」を目指す目的ある人間となり、長寿への飛躍台に立つことができました。

その上、侵略戦争に参加しながらも生きのびた好運児でもある私は、15 年間の逆境のなかで、さらに心身ともに鍛えられましたが、とくに「撫順戦



講演会に駆けつけてくれた介護士さんたちから贈り

犯管理所」での坦白運動を通じて精神的飛躍を遂げました。文字どおり「侵略戦争の尖兵」から「平和を守る人間」へと思想転変することができました。すなわち、第2の人生における新たな目的、つまり反戦平和、日中友好の社会活動を目指す人間となることができました。

そして、68才で定年退職以降の第2の人生では、「中国帰還者連絡会」、つづいて「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の特別会員として、「侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する」と言う「有意義なる社会活動」、そのことに全勢力を注ぐことができました。

そして、私とともに「反戦、平和、日中友好」の活動に奮闘されてきた「中帰連」と「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の皆さま、この方々の力ぞえこそが常に私の心身を活気づけ若がえらせて、今日100才まで生きられた決定的な要因でありました。すなわちこのことが「長寿の秘密」でありました。

私のつたない証言活動を支援し、激励して頂いた多くの方々に対して、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今日はまた、つたない私の人生放談にも耳を傾けていただいた皆さんに、重ねて感謝します。有難うございました。（拍手・・・しばらく鳴りやまず）

（2013年7月13日、於「茅ヶ崎市民文化会館」）

絵鳩さんの体験にキーワードは「撫順戦犯管理所体験」にあります。もちろんそれだけではありません。

目の前で自分が通っていた小学校が崩れ落ちた**関東大震災での恐怖の体験**、水戸高校での**梅本克己や後藤田正晴などとの交遊**、東大在学中に**2.26事件に遭遇**、文部省入省（教学局思想科配属）での**河合栄治郎教授検閲作業**、**尾崎秀実との出会い**、その後**山梨県女子師範学校、長野県上田高等女学校教師**を経て**1941年7月に入隊**されました。

「撫順戦犯管理所体験」をはじめとしたこれらの話しはこれまでも、るる話して下さっていますがまだまだ聞いておかななくてはならないことはたくさんあります。

入隊後の4年間の苛烈な戦争体験、5年間のシベリア抑留体験、そして6年間の戦犯管理所体験については受け継ぐ会神奈川支部発行の冊子＝3部作に収録されています。

それでも「僕の話聞いてくれる人には応えたい」「それは僕の生きがだから」とおっしゃってくださっています。これからも絵鳩さんの体調と相談しながら小規模な学習会をお願いしようかと考えています。